加東市人権啓発情報誌

夢★きらめいて

No. 9

加東市教育委員会／加東市人権・同和教育研究協議会　平成22年3月1日

でんでん、ででんで♪伝の助ー。タッチのいい歌声が聞こえています。
2月14日の「あったか加東冬のまつり」で加東伝の助のテーマソングが披露されました。歌っているのは小学生の「シュガー・キッズ」のみなさんです。

目　次

- 市同教の活動……2～3
- 学校教育部会・企業人権……4
- 集会所講座事業……5
- 男女共同参画レポート……6・7
- 人権レポート……8
- 中学生の人権作文……9～13
- 市民人権講座修了者……14

実践こそ

教育委員会 教育部長
大畑一千代

人は　その行為を通して
存在する
人の行為を生むものは
その人の心である
人の心は　行為を通して
語られる

旧社町の「道徳心を高める」都市宣言です。

いくら正しいこと、良いことを頭で考え心に思っていても、形として表さなければ何にもならない。学習したことを実践してこそ真に学習したことになると思います。

落ちているゴミを拾い、体の不自由な人には席を譲る。「いじめ」られている人が一番つらいのは、周りの人が何もしてくれないことではないでしょうか。

小さな勇気、一人の「良い」行為が周りの人々を変え、その人たちがさらに周りを変えていく。その一人になれるよう実践したいと思っています。

高めよう人権意識、広げよう交流の輪

加東市人権・同和教育研究協議会

地区住民学習から（抜粋）

■住民学習の実施状況

（22年1月末現在）

地区によっては、住民が一堂に会することが困難であったり、学習会の案内をしても人が集まらなかったりするなど、学習会の開催が困難な状況にあります。そんな中、バス旅行等人の集まる機会を利用して、人権ビデオを視聴してもらうなど、よく工夫された取組が見られました。

また、住みよいまちづくりをめざしての取組と連携して、地区をあげての「ふれあい祭り」「伝統行事」の実施や「ふれあいサロン」の会場で人権啓発パネルを展示するなど特色ある取組を工夫した地区もあります。さらに、年間を通じた「人権啓発紙」や「文集」を発行した地区もあります。

■学習内容

①「親愛なる、あなたへ」を視聴して

71地区で73回、延べ約2410人がビデオを視聴して、感想を話し合ったり、意見交換したりして学習しました。

《主な感想》

●近い将来の自分を見る思いで身につまされる。いざとなれば自分はどう対応できるか今一度よく考えたい。

●近所づきあいは妻に任せっぱなしだったので反省しています。今後はできるだけ地域に溶け込んでいきたい。

●定年を迎えたり、配偶者を失ったりした後も人間らしく元気に生きていたい。人生80年時代を迎える現在、老いとうまく付き合うことが大切であり、この点からも地域でのつながりが大きな意味を持ってくる。

●妻が亡くなり、地域の人たちと関わるにつれ、「まだやれることがありそうだ」という気持ちの変化。この気持ちを持つことが重要。

●誰もが通る道で、自分ひとりでは生きていけないと気付きました。他人のことはよくわかるのですが、自分のことは気付かずわかりません。どんな時も感謝して毎日、家族や近隣と明るく助け合って生活できたらと思います。

●女性の参加者から「うちの主人に見せてやりたい」との発言あり。

●恩返しという言葉は知っていたが、「恩送り」という言葉をはじめて知ってとても嬉しくなりました。

●子どもの登校時における「見守り隊」が組織されており、まだコミュニティは保たれている。この村では一種の「恩送り」が見られる。

●一歩踏み出せば、できることがあるが、なかなかその一歩が出ない。勇気を出してボランティア活動に参加したくなった。

●地域の世話役をして初めて人の世話をする苦労がわかった。村内に居ながら、あまり活動に参加せず、人の悪いことばかりを見ていたように思う。

●「自分が役に立っている。認められている」という自己満足な気持ちが生きがいへとつながっていく。

●今までいろんな人から恩を受けて生きてきた。その人に恩を返せないけれど、今後はいろんな人に恩を返して、帳尻を合わせて人生を終わりたい。

●ボランティア活動をしていると、「いいご身分！」と言われることがある。地域を支えるという意味では大切なことだと思うのですが。

●介護の問題は深刻で、家での介護、施設での介護どちらがいいのか判断がつきかねるが、今のうちからしっかりと準備しておかねばならない。

●若い母親に意見すると、必ず反発があるのでいいにくい。ビデオのように意見を素直に聞いてくれるだろうか。

●感謝の気持ちが大事。しかし、表わすのは難しい。ビデオを見て、近い将来の自分のように思えて身につまされた。

●日ごろの自身の言動を振り返ることができた。まず、身近な人や出来事に関心を持つことが、人権尊重の第一歩です。住民みんなが「まちづくり」の主人公であることを自覚し、持っている能力・経験を活かし、主体的に生活していけばより良い地域社会が実現できるはず。

●今の日本は人間と人間の関わりが少なくなってきている。もっと地域や家族を重視する社会にしていかねばならないと思う。会社中心、自己中心的社会になりすぎている。

●地域のことに無関心になりがちです。一人一人が構成員であることを自覚し自分にできることから始めれば活動範囲も広がり、自分の居場所が見つかる。

②他のビデオを視聴して

21地区で23回、延べ725人が「職場の人権・えっこれも人権？・私の好きなまち・みんな友だち・盲導犬クイールの一生・老いを生きる・ねずみくんのきもち・おくりびと・ありったけの勇気・いじめはゼッタイ悪い・渋染め一揆」などを視聴して学習しました。

③講演会等

講師を招いての講演会が14地区で実施されました。演題は、「人権を意識した地域づくり」「同和問題のこれから」という人権そのものに関わる内容から、地域のニーズに応じた「災害弱者を考慮した防災」「縁と絆」「先祖供養」など様々な内容です。

《主な講師》

亀田隆光さん、大西俊介さん
堀井洋一さん、尾城文雄さん
深田壽嗣さん、大東太郎さん
榎本英樹さん、友井公一さん
小谷英進さん、藤村隆淳さん
東谷　保さん、小林伶子さん
藤本謙造さん、吉田省三さん
内藤晴樹さん、井上　茂さん
高橋たか子さん（順不同）

④その他

そのほかに、人形劇、腹話術、マジックショー、舞踊など地域の方の技芸修得者を招いてのふれあい活動も見受けられました。

腹話術

マジックショー

人権パネルの展示

そうめん流し

防災・消火訓練

■ふれあい活動

地域づくりをめざして、様々なふれあい活動が実施されました。とりわけ、普段接することの少ない三世代の人々が交流し合う場が数多く設定され、明るく豊かな人間関係を築いていこうとする意欲的な取組が見られました。

《主な実践活動》

●スポーツ活動
　バレー、ゲートボール、ソフトボールなど。
●伝統行事の継承、祭り
●文化及び多文化共生の活動
●ふれあいの集い
●その他
　・ふれあいバスツアー
　人権ゆかりの地訪問など
　・ふれあいサロン
　・人権パネルの展示
　・沿道の花壇作り
　・クリーンキャンペーン
　・サツマイモの栽培と収穫祭
　・防犯パトロール
　・防災・消火訓練
　・隣接地区との交流
　ハイキング・登山

運動会

■啓発紙、文集の制作

一年間の活動を啓発紙や文集にまとめ、全戸配布し、人権意識の高揚を図っています。啓発紙「話・輪・和」の発行。文集「あのことばあの行為」の発刊

お知らせ

第57回　兵庫県人権教育研究大会
東播磨大会

● 日　時　　7月31日（土）午前10時～
● 場　所　　兵庫教育大学

差別の現実を深く認識し、一人一人が主体となった力強い教育・啓発活動を展開するため、人権尊重の精神に徹した教育内容の創造と実践交流を図ります。

学校教育部会から

■公開授業

学校教育部会では年間３回の人権・同和学習の公開授業を行っています。24名の部員が授業を参観し、授業後の研究協議を通して人権課題の解決に迫る授業改造に努めています。本年度は新型インフルエンザ流行のため、中学校は中止しましたが、幼保は河高保育所で、小学校は鴨川小学校でそれぞれ実施しました。

河高保育所公開保育

8月10日

●テーマ　「異年齢保育を通して思いやりの心を育む」

●ねらい　「異年齢の友だちと関わることを通して思いやりの気持ちを持つ。小麦粉粘土の出来上がる過程を楽しみ、イメージしたものを作る」

鴨川小学校公開授業

●第１、２学年

●指導者　藤井立子教諭

●資料　「はずかしがりやのかばくん」（ほほえみ）

●ねらい　「みんなの励ましの中で、自分を高めていこうとする態度を育てる」

12月10日

企人協の活動

■管外研修　（11月17日）

「人権のふるさと」を訪問

私たち企人協は、加東市同教、人権擁護委員の方々と奈良県御所市にある水平社博物館・西光寺・人権のふるさとへ合同視察研修に出かけました。

●当日は、あいにくの雨天になりましたが、いずれの施設においてもガイドさんより詳細で丁寧な案内や説明を受け、人権への関心を増すとともに往時の人々の生きざまや生活環境に思いをはせることができました。

●参加者からは、「書物や映画から水平社運動についての知識はあったが、実際に自分の足で現地を歩き、目で見ることにより差別の不合理に立ち向かった西光万吉はじめ柏原の青年たちの熱き思いや行動に心をうたれ、いい研修になった」という声が多く聞かれました。

西光寺

■社員研修会（２月15日）

「ぬくもりを感じて」

講師　中倉茂樹さん

高校時代に、人権集会で「部落民宣言」し、本当の仲間としてつながることができた。このとき感じたぬくもりを、みんなに伝えられる人間になりたいと決意し、本当の同和問題学習に取り組み、差別との闘いを始めた。そして、結婚差別と闘う今を熱く語っていただきました。

参加者からは、「ご自身の体験に基づいての話で大変わかりやすく感動した。心と心のつながりを大切にして、生活したい。」という声が多く聞かれました。

新着ビデオ紹介

「あの空の向こうに」

ビデオ　38分

ケータイやインターネット等の利用にあたっての人権意識・人権感覚の重要性や人と人のふれ合い・語り合いの大切さを訴え、こころ豊かなコミュニケーション社会をめざして制作された作品です。

「おじいちゃんは丹波杜氏」

DVD　17分

おじいさんの酒造り就労の過程から基本的人権の職業選択の自由の大切さを学びます。

三百年の丹波杜氏の歴史をはじめ、従業者の精魂と技の歴史を学び伝えます。

集会所事業の活動

■窪田集会所歌謡講座
移動研修　（12月8日）
丹波杜氏の歴史探訪

篠山市郷土史研究家の中野卓郎さんに丹波杜氏の歴史を解説していただきました。

丹波杜氏酒造記念館

篠山城三の丸
市原清兵衛顕彰碑

帰路、国道372号線から少し入った今田町市原の清兵衛の生家近くの西方寺に、清兵衛顕彰碑がありました。

大槻住職のお話

大さざんか
西方寺の清兵衛供養碑

西方寺の住職大槻さんから清兵衛についての貴重なお話を聞くことができました。碑の側にある「大さざんか」は迫力がありました。

今田市原村の清兵衛

「宝暦、天明（1751～1788）の頃、各地で天災が起き、凶作が続いた。

篠山藩においては凶作の原因として農民が酒造稼ぎ等の出稼ぎに出るため田畑の管理が充分できないことだとして、厳しい「出稼ぎ禁足令」を出した。これに対して、今田市原村の清兵衛は江戸に上り、藩主に命がけで直訴し、「100日間の出稼」を認めさせたのである。

丹波杜氏酒造記念館は篠山城の東にあり、清兵衛の碑は篠山城の三の丸公園にある。

おじいちゃんは丹波杜氏

昭和30年、篠山東部の三ケ村が合併して「城東村」となった。新たな村おこしとして、被差別部落の人たちにも酒造出稼ぎの門戸を開放するために、地域社会をあげて取組むことになった。大対杜氏の計らいで一人の青年が、西宮酒造会社へ蔵入りしたのであった。一生懸命働いた青年は、その責務を果たした。

大対杜氏胸像
（丹波杜氏酒造記念館）

DVD「おじいちゃんは丹波杜氏」

就労門戸解放に尽くした大対杜氏の胸像が丹波杜氏酒造記念館前にあります。

この物語のDVDを出発前に観賞しました。

新規購入図書の紹介

①『皮革の歴史と民俗』
のびしょうじ（解放出版社）

履物、太鼓など皮革関連業についての新知見や部落史の理解に欠かせない皮革の基礎知識を盛り込んだ前近代皮革史の基本図書。

②『牛を屠（ほふ）る』
シリーズ向こう岸からの世界史
佐川光晴（解放出版社）

ナイフを握り、牛を相手に働き続けた屠場での十年の日々。屠畜解体従事者への世間の恥知らずな差別と偏見はある。だが、だれがどう思おうと「牛を屠る」仕事は続けるに値する仕事なのだ。

③『部落差別の謎を解く』
キヨメとケガレ
川元祥一（にんげん出版）

「差別は人間の本性」などという言葉に逃げず、個々人が具体的に自らの意識を「差別を克服する思想」へ向かわせなければ部落差別はなくならない。

④『人権歴史マップ』
阪神版、播磨版、丹波版、神戸版の４冊
（ひょうご部落解放研究所）

研修会やフィールドワークに活用できる各地の「人権歴史マップ」を掲載。

●第3回　誰もが活かされる社会をめざして
～わたしたち一人ひとりにできること～

11月5日

■生まれたばかりの子どもは、大人に依存しなければ生きていけない。大人になるということは、依存からいろんな人と依存関係を広げていき自立していくことである。一人一人が個々にジェンダー感を持っている。ところが、これが集合体になったときに画一化されていき、価値観の良し悪しが生まれてくる。ジェンダー規範では、男の依存は許されないが、女は許される。このアンバランスな関係がジェンダーを生み出している。

アンケートから抜粋

●男性の非行、自殺が女性より多いのはジェンダーからきているということがわかった。「男は強くあるべ き、弱音をはけない・・」という社会の考え方が大きく影響していることがわかった。（50代女）

●私の中にジェンダーがいっぱいあることに気づいた。（50代女）

●話を聞いて、とてもよくわかった。家制度については、自分が今おかれている立場に思いを馳せ考えさせられた。（50代男）

男料理でおもてなし Cooking～

講師　　辻　隆子さん（管理栄養士）

12月22日、滝野公民館において辻先生をお迎えして、男料理教室を開催しました。家族へのおもてなし料理を作りご家族（妻、‥）から大変な好評をいただきました。

●男料理とは思えぬ品数の多さ、すばらしい味付けに超驚きでした。
●ふだん料理をしないので、女性の大変さが良くわかりました。
●簡単な料理だったので覚えやすかった。
●どんな料理ができあがるのかなあなんて思っていましたが、何の何の味付けも良く、見た目も美しくてびっくりしました。お肉のお寿司がおいしかった。

●小鯛の南蛮漬けが一番おいしかった。
●品数の多い献立でバラエティに富んでいて、男性の料理としては十分すぎ、大変満足させてもらいました。
●持って帰った料理は家内が完食しました。

●料理をしていると、味のことや、次に自分で作れるのかなぁーなど頭をよく使うので楽しい。
●主人といっしょに作ってみます。
●わたしにとっては、久しく家庭的な心のこもった料理であったと思った。

●他の地域の人と話ができたのが良かった。
●下ごしらえのかかる料理、量の多さ等で時間が遅くなったのが残念でした。

●こんな素敵な料理ができるのなら主婦業をバトンタッチしてほしいと心から思いました。
●帰ってきて、献立について工夫したことや苦心したことを生き生きと話してくれるので楽しかったんだろうなあと思いました。
●夕食は、夫婦でひと足早いおせちをいただき、おしゃべりも盛り上がりました。
●夫が料理教室に参加するようになり、積極的に台所に立つようになり助かっています。

夫も家内になる？

夫の定年退職を目前にした妻の声として「定年になって夫が朝から晩まで家にいると思うとゾッとします」という話をよく聞く。これには「三度三度の食事の準備も毎日のこととなると煩わしい」という気持ちが含まれているのでしょう。

妻は残りもので簡単に自分の昼食を済ませてしまうが、夫が家にいるとなると、そうもいかない。

それが毎日のこととなってくると「三度三度の食事の準備も煩わしい」気持ちになるのも当然かもしれない。

最近は男性向けの料理教室が流行っている。

昔は「男子厨房に入るべからず」と言われていたが、今では「男子厨房に入る時代」となり、定年後、料理に限らず家事について協力する夫は増えてきている。

しかし現役時代、家のことはほとんど妻まかせという傾向が強かった夫が、定年後、急に変身するのは難しいものである。定年後は夫も「家内」になるわけであるが、「シンマイの家内」は「大先輩の家内」によき指導を受けて、生活面の自立能力を高めていくことが必要となってくる。

ぼちぼち定年前から経験を積んでおくのも一考かと。

男女共同参画レポート

気づきからはじまる男女共同参画セミナー

講師　遠矢家永子さん　（NPO法人SEAN事務局長）

講師に遠矢家永子さんをお迎えして、3回シリーズのワークショップを開催しました。必ず参加する、相手の意見を尊重する、時間を独り占めしないという３つの約束で始まりました。

●第1回　「人権尊重」って誰のため？　～わたしとあなたを大切にする～

■遠矢先生から「生れ変わるとするならば、男？女？」という質問に対して　10月22日

私は男です。家内を見ていたらそう思った。明日から女として生きなさいと言われたら、マンションから飛び降りるかなぁ（笑い）

私は女です。でも男として生きなさいと言われたら、それはそれで楽しく生きたい。

アンケートから抜粋

●とても深い話が聞けた。今日の講義を受けて自分自身がすごく固定観念を持っているということに気づかされた。本来のセクシュアルライツについても知り、自分の中の視野が広がった。（20代女）

●無意識の中で、性別に対する固定的な思い込みがあったことがわかった。（30代男）

●普段あまり考えないことだったので、とても興味深く聞くことができた。私自身、性的な差別を受けたことはないが、子どもに「男の癖にすぐ泣かないの!」と言っている。反省した。（40代女）

●外科医と息子の話をはじめ、実際に考え、学ぶことができた。人権については、苦手意識が強かったが、最近少しずつ変わってきた。今回もそのひとつの機会となった。（20代女）

●第2回　ジェンダーと暴力の連鎖　～DV・虐待・セクハラ・自殺を生み出すもの～

■女に期待されること、男に期待されることから、それぞれ感じていることを発表し、そこから、どんな生き方が良いのか、できるのか、話し合った。自己決定は自己の中にあり、人に言われるものではない。男らしい人、女らしく生きた人があってもよいではないか。自己決定権を尊重し合う生き方ができればいい。　10月28日

女に期待されること
家事、育児、介護、料理、花、勉強できなくてOK、礼儀正しく、良妻賢母

→ 理想像であり、とても無理。（女性の参加者から）

男に期待されること
たくましさ、相撲、リーダーシップ、仕事、大黒柱、勉強する、経済力、長男は行事に参加

→ 100%無理、このような生き方はしたくない。（男性の参加者から）

アンケートから抜粋

●男に期待されていること、女に期待されていることを改めて気づいた。知らず知らずのうちに相手に求めていた。（20代女）

●性別の問題ではなく、自己決定、自己選択が尊重されるべきという話に共感できた。（50代女）

●メディアが作った生き方の枠にはまらないよう自分らしく生きたいと思った。自由で柔軟な考え方で、相手に押し付けないようにしたい。（30代女）

人権レポート

加東市人権尊重のまちづくり基本計画（案）まとまる

2月8日、第5回策定委員会を開催し、原案がまとまりました。

堀井委員長、尾城副委員長から山本市長へ計画書（案）が提出されました。

今後は、人権問題審議会へ諮問し、答申を受け、3月末完成に向けて進めていきます。市民の皆さんには、計画書の概要版を配布いたします。

人権を考える市民のつどいから

人の世に熱と光を！

講師　西光寺副住職　清原隆宣さん

2月6日、社福祉センターで人権を考える市民のつどいを開催しました。中学生の人権作文発表、住民学習実践発表、そして奈良県御所市から清原隆宣さんをお迎えして、間違った世の中のものさしについてお話いただきました。

講演会抜粋

88年前に全国水平社が生まれた。差別を受けている地域の人たちが、自らの手によって差別をなくし、人が人としてあるがままに当たり前に尊ばれる世の中を創っていこうと立ち上がった運動である。水平社は、間違った世の中のものさしを変えていこうとしました。

差別は間違ったものさしから生まれる。
私はたまたま御所市に生まれた。みんなたまたま人として生まれている。人として生まれることは難しい。その命は大切でかけがえのない命である。

私の地域は差別を受けてきた村である。同じ人として生まれてきたのに、特定の地域に生まれたというだけで差別を受けてきた。生まれた所によって、「あかん」というものさし、「ええ」というものさし、このものさしが差別を生んできた。生まれた所によって人の値打ちをつけようとする間違ったものさしに規格がない。

顔が大きくても、小さくてもどうしようもない、これが個性だ。おまけに頭も大きい、しかし値打ちは一緒だ。今もこのものさしは残っている。

大安の結婚式の離婚が一番少ないというが、大安に結婚する人が一番多いからだ。友引に葬式をだすと友を引くというが、私の寺ではそんなことはない。

物事を自分で考え、自分で判断し、自分で行動しないからこうなる。

人間を尊敬するということは「あるがままにまるごと認め合う」ということである。

人権と福祉のまちづくりフェスティバルから

老老介護4000日、愛の軌跡

－高齢社会を強く生きる－

講師　南　信孝さん

11月29日、社福祉センターで人権と福祉のまちづくりフェスティバルを開催しました。

萩市にお住まいの元教育長、南信孝さんをお迎えして、ご自身の病気、妻の介護についてお話いただきました。

講演会抜粋

若年性アルツハイマー、一人でも多くの人にわかってもらいたい。

私の妻の場合は若年性アルツハイマーと言われる病気で、平均52歳くらいでかかり、以後の平均寿命が8年から10年と言われ、徐々に脳細胞が委嘱して精神寿命を失っていく。

今、私は小便ができて、うんちができて、食べられて、・・・よかったと感謝している。

以前、胃に癌ができ、女房に癌の宣告をした。女房が一番ショックを受け、そのショックで女房の脳が縮みかけた。だんだんと縮んでいって赤ちゃんの脳になっていった。発病して3、4年で子どものことも全て忘れ、その後噛むこと、飲み込むことを忘れ、寝たきりとなり、後は死をまつばかりの病気である。

ある日、紙おむつをすんなりとはいた女房を見た時、悲しかったけど思った、紙おむつをあてることが介護ではなく、汚さないことが介護だと。お風呂に入れることが介護ではなく、お風呂に入って気持ちよくなったときが介護だ。

音楽で介護をする人もいる。ハミングが12年間、妻の笑顔をかもし出してくれた。口笛を吹くと女房が喜んで口をつかみにくる。薬だけが認知症のみなさんの薬ではない。鳥、音、花の美しさなどあらゆる全てが認知症の方の薬である。

今、元気で健康でも明日どうなるかわからない。ひとごとではなく、その時にどう対応できるか、していくか、私たちが生きていく上での課題である。

「家族」

社中学校
３年　田中　　愛さん

私たち3年生は、7月に、パルモア病院の助産師さんからお話を聞く機会がありました。生まれてくる赤ちゃんは、赤ちゃんなりにお腹の中で必死に生きようとしていること、生まれてこようとしていることを知って、本当に感動しました。私も、同じように、生まれてきたんだと思うと、なんだか、嬉しいような、恥ずかしいような、くすぐったい気持ちになりました。お母さんの赤ちゃんへの愛情を感じるとともに、新たな命が生まれる時には、人と人とが支え合い、力を合わせているんだと感じることができました。

さて、私は、今、父親と二人暮らしをしています。母親、兄、姉たちとは別々に暮らしています。

私には、幼いときからの母親の記憶が全くありません。参観日に来てもらったり、運動会に来てもらったり、そんな思い出も、全くありません。

父は、いつも仕事で朝早く出ていき、夜遅くまで帰ってこれなかったので、私は、近所のお姉さんの所にずっと預けられていました。

小学校2年生の時には、父の仕事が変わり、ひいおばあちゃんのいる福田に引越ししてきました。父は、また朝が早く、夜は遅いという生活が始まりました。

私は、小学3年生ぐらいから、自分でできる家事は手伝うようになりました。

毎日、夕方の5時にはご飯を炊くこと、晩ご飯の後、洗い物をすること、洗濯をすること。それがあたりまえになって、遊んでいても5時前には家に帰っていました。

しかし、中学校に入って部活が始まると、とても忙しくなり、毎日、「家に帰りたくない」と思ってしまい、そして、そのたびに、「お母さんがいたらなあ」と考えることが多くなっていきました。夏休みや冬休みに、母が泊まりに来ると、このままの時間が、ずっと流れていけば、という思いがどんどん強くなります。でも、数日たつと帰っていく母。母の前では、笑顔で「さようなら」が言えても、また家で一人になると、淋しくてずっと泣いていました。

そんな日々の中で、3年生になり、最初に話した助産師さんの話に触れ、命の誕生、そして、「家族の大切さ」を、改めて考えるようになりました。

新たな命が生まれる時には、人と人とが支え合い、力を合わせています。でも、一つの命が成長し、大人になっていく間に、いろいろな、やむを得ない生活の事情や、病気や、事故などで、家族の形はさまざまに変わっていくことがあるのです。両親がそろっている家族ばかりではないし、片親であったとしても、親が両方いなかったとしても、それは家族の一つの形なのです。

離れていても、朝早くから夜遅くまで仕事ですれ違うことが多くても、親は、子どものために働いてくれるし、子どものことを考えてくれています。

私は、母たちと会える時間を大切にしようと思えるようになりました。また、家で一人でいても、自分のできることをしていこうと考えるようになりました。

よく、「親がうざい」「親なんかいらん」と言う人がいますが、実際親がいなくなるととても困るし、淋しいし、ぽっかりと抜けてしまったような感じです。いなくなる前に、失う前に、家族の大切さに気づいてほしいと思います。そして、家族との時間をもっと大切にしてほしいと思います。

私の母が私を産んでくれたからこそ、私の父が私を育ててくれたからこそ、私は今、こうして笑い、考え、成長することができるのです。私は、毎日、両親に感謝しています。

お母さん、生んでくれてありがとう。

お父さん、育ててくれてありがとう。

今の私には、感謝することしかできませんが、大人になったら、両親が喜んでくれるような親孝行をしたいと思っています。

「姉弟として」

滝野中学校
３年　高橋　悠花さん

私の弟は障がい者です。一緒に育ってきた私は、弟を通してたくさんのことを体験してきました。

弟は5歳の時に障がいがあると言われました。でも、私は特に何も気にせず過ごしていました。弟は言葉は出せても、会話をすることができないこともあり、ジェスチャーや表情から気持ちを読み取って遊んできました。それは、ごく当たり前のことだと思って、過ごしてきました。

ある日のことです。母と弟と私の3人で買い物に行きました。弟が、いつも通りの順番で買い物しなかったので、自分のペースが乱れ、パニックを起こしてしまいました。泣き叫んでいる弟を、母が必死になだめていました。正直、私は見ているのが恥ずかしくなり、早く帰りたい思いでいっぱいでした。そして、キョロキョロしていると、笑いながらこちらを指さす子どもを見つけました。その瞬間、自分の家族を恥ずかしいと思っていた自分が、恥ずかしくなりました。そして、弟に申し訳ないという思いと、その子どもに対する怒りとで、私の頭はいっぱいになり、とても嫌な気持ちになりました。今でも、興味半分で通り過ぎていく人々の目が、私の目の奥に焼き付いています。でも、それ以上に、そんな人たちには絶対に負けない、これからは、弟を守れるようになろうと、強く思いました。

私は、2年生のトライやる・ウィークで、弟の通う学校を事業所に選び、5日間活動しました。そこでは一人一人の適正に応じた活動をさせていました。そこにはいろんなタイプの子がいて、ある子は、言葉は出てくるけど、相手とうまく会話のキャッチボールができなかったり、またある子は算数がすごく得意だったり。でも、みんな真剣にきちんと勉強しているところを見て、すごいなと思いました。弟のことも先生はよく見てくださり、カードを使った数合わせのゲームをしてくださっていました。これを通して、弟を飽きさせないように数の勉強をさせると同時に、集中力をつけさせるように支援してくださっていました。そこで、私が驚いたのは、ゲームをしているときの弟の真剣な表情と、ゲームをやり終えた自慢げな表情でした。それは、今まで見たことのない表情だったのです。その時私は、こんないい表情をして学校で勉強をしているだと正直驚きました。また、こんな表情ができるくらい成長しているんだな、成長させてもらっているんだなと、学校の先生に感謝しました。

弟は周りの人の言葉の指示が理解できないし、自分のしたいこと、して欲しいことを相手に伝えることが苦手です。そんな時は、絵や写真のカードなどを見せてやると、自分の思いを私たちに指示してきます。自分の意思が伝わったときの弟の顔は、うれしそうで、とても穏やかな表情になります。

弟はみんなと変わらないのです。弟は、見た目はごく普通の男の子です。ただ、意思の伝え方に「会話」が少ないだけです。よく表情を見ていればわかります。

しかし、どうしても自分の思い通りにならないと、パニックを起こしてしまいます。叫ぶこともあります。そんな時は姉の私でさえ困ります。でも、必ず何か理由があります。そこを、どう理解しようとするかが大切なんだと思います。

家族以外の人は、弟への接し方に困っているかもしれません。でも、少し近づいて手助けをしてもらうだけで、本人も嫌な気分にならないし、相手の方も嫌な気持ちを持つということもないでしょう。弟には、あたたかい手助けが必要なのです。

弟から学んだことは、人同士の助け合い、支え合いです。多くの人とのふれ合いや、顔を見て話す楽しさ、そして、お互いの支え合いの大切さなどです。助け合いに差別は必要ありません。このようなことを教えてくれた弟を、私は誇りに思います。たくさんの人と出会い、多くのことを体験して、本当に貴重な経験をすることができました。だからこそ、私は、自信を持って言います。差別やいじめ、そんなものは絶対に必要ありません。

これからは、みんなで助け合い、支え合うあたたかい心が必要なんだと思います。

「高齢者と共に」

東条中学校
３年　櫛部　麻衣さん

一昨年の秋、私はトライやるウィークで高齢者福祉施設（伽の里）を訪問しました。どこに行こうか悩んだ結果、将来人の役に立つ仕事がしたいと思い、伽の里に決めました。伽の里を訪問して、今まで経験したことのない経験がたくさんありました。

その中で、一番驚いたことは、私の手を握って離そうとせず、１時間以上も涙を流しながら話を続けるおばあさんの姿でした。おばあさんが、「子どもの頃は、戦争中で今の子どもたちみたいに自由な暮らしができなかったから、今の子どもがうらやましい。」と何度も何度も言われていたのがとても印象に残りました。よく思い返してみると、このおばあさんは伽の里に家族と離れて住んでいるため、私に話し相手になって欲しくて、いっぱいしゃべられたのでしょう。おばあさんの話し相手になってあげた事で、心が和まれ今まで見なかった笑顔を見ることができました。きっとさびしかったのでしょうね。おばあさんの笑顔を見た時、私はとてもうれしい気持ちになりました。

伽の里には、家族と離れて住んでおられるお年寄り（スティ）とデイサービスで来られるお年寄りとに分かれています。私は、どちらのお年寄りともふれ合って気がついたことがあります。デイサービスに来られるお年寄りはスティのお年寄りに比べて、どの人も笑顔がキラキラ輝いていました。それはどうしてなのか考えてみると、デイサービスのお年寄りは毎日家に帰れるという安心の中で過ごされているからなのでしょう。

でも、スティのお年寄りはどうなのでしょうか？少し体が不自由なだけで家族から離れ養護施設や病院でずっと生活されているのです。本当は家族と一緒に生活したかったはずです。私が活動していた一週間の間にその方に面会に来られる人はあまりいませんでした。たとえ家から離れることになっても、もっと家族の人が積極的にお年寄りに会いに来られることで、お年寄りの気持ちはとても改善されると思います。

では私たちがお年寄りに対してできることは何でしょうか。

まず、いつもの生活の中にお年寄りと話す機会を設けたらいいと思います。特に、保育園や小学校で行うと効果的だと思います。それは、小さい頃からお年寄りとふれ合う体験をすれば、お年寄りに対して優しい心を持つことができるからです。お年寄りも、小さい子どもと接していっぱい元気をもらって楽しい時間が過ごせます。こうなると一挙両得です。

次に、お年寄りがもっと活躍できる場面も必要だと思います。70歳といってもまだまだバイタリティのある方もたくさんいらっしゃいます。手芸やお料理、裁縫、お花、お茶の先生として迎えるのはどうでしょうか？　私たちの知らない知識や技術など、きっとお年寄りから得るものがいっぱいあるはずです。

これからの未来は高齢化がより一層進んでいくと考えられます。そして私たちも何十年か後には年寄りになる時が来るはずです。

最後にトライやるウィークで得た経験を大切に、お年寄りを一人一人が家族、あるいは地域の一員として一緒に生活しているという気持ちを持つことが必要だと思います。

こまったときには相談してください　女性の人権ホットライン

夫やパートナーからの暴力、職場等におけるセクシュアル・ハラスメント、ストーカー行為といった女性をめぐる様々な人権問題についての相談を受け付ける専用電話相談窓口です。
相談は、全国の法務局・地方法務局において、人権擁護事務担当職員及び人権擁護委員がお受けします。
相談は無料、相談内容の秘密は守ります。

○ 電話番号：0570－070－810（全国共通）
○ 受付時間：平日／午前8時30分から午後5時15分まで

かけないと、これからも後悔が続くと私は思いました。そしてついに心を開くことを決意したのです。

「私は美咲。あなたは。」と私は勇気を振り絞って言いました。彼女はとても嬉しそうにしながら

「ワタシ、は、ジョネア。」と片言の英語で私に言いました。

私はホッとしました。自分の中で何かの重しがとれたように思いました。それだけではなく、弱い自分に勝ったという思い、彼女を喜ばせることができたという思いなどを感じて、これまでにないほどの満足感にひたっていました。

それから私の親しい友達の中に、黒人の子は増えました。もちろん黒人に限らず、欧米人、韓国人、インド人、中国人、メキシコ人、スペイン人、ベトナム人、モンゴル人など、ここには書ききれないほどたくさんの人種の友達ができました。

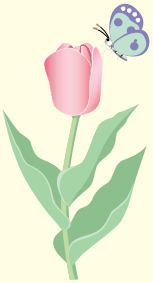
しかし二年後、私は帰国することになりました。エリンやキャロラインやたくさんの人と別れるのはとてもつらかったです。でもそんな時、私を一番なぐさめてくれたのは、あのジョネアでした。ジョネアとは話してみると気が合ったので、いつも一緒に過ごしていました。そんな彼女だからこそ私を一番理解してくれていたのだと思います。これは、弱かった自分の殻を破ったから気づいたことです。最初からあの手をとっていたら、気がつくことはなかったでしょう。成長するから見えるもの、得るものがあると思います。ジョネアは私の心にたくさんのものを残してくれました。

私は自分の中の人種差別を乗り越えることで、たくさんのことを学びました。けれど世界には、人種差別を乗り越えようとせず、見た目が自分たちと違うからだとか下らない理由で、分かり合おうともせず、憎しみをいだいたり、迫害したりする人がいるとたびたび耳にします。私はそんなことをするのを許せないし、する理由が理解できません。だから私は教えてあげたい。どんな人種の人も皆同じ人間であり、必ず分かり合える仲間なんだということを。アメリカは決して、「人種のサラダボール」という、人種の一つ一つが孤立した物体であるのではなく、全ての人種がまざり合った暖かいスープのようになれるのだと私は信じていることを。

私の知っている詩に、こんなものがあります。たくさんの人々が

あなたの心の中を
行ったり来たりするでしょう
けれど本当の友達は
あなたの心に
足跡を残すでしょう

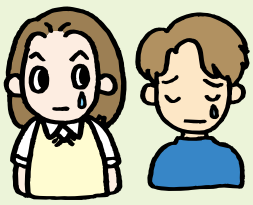
私はこの詩を見てからできるだけ多くの人の心に、「足跡」を残せるように、本当の友達をたくさん作ろうと思いました。これからも心の中に「足跡」を残す場所がなくなるくらい、もっともっと色々な人種の友達を作っていきます。そして、世界から「人種差別」という言葉がなくなることを祈ります。



こまったときには相談してください　子どもの人権110番

学校で友だちから「いじめ」を受けて学校に行きたくない、でも先生や親にはいえない・・・、誰に相談していいか分からない・・・。もしもそんな苦しみを抱えていたら、一人で悩まずに、お電話ください。法務局の職員、または人権擁護委員（子どもの人権専門員）が、皆さんのお話を聞いて、どうしたらいいのかいっしょに考えたいと思います。相談は無料、相談内容の秘密は守ります。

○ 電話番号：0120－007－110（全国共通フリーダイヤル）
○ 受付時間：平日／午前8時30分から午後5時15分まで



「心に足跡を」

兵庫教育大学附属中学校
３年　大橋　美咲さん

小学5年生の夏、私は父の仕事の都合でアメリカのバージニア州へ行くことになりました。バージニア州はアメリカの東海岸にある州で、私の住んでいた地域は東洋人やヒスパニックの人々が移住してきていました。ですから、外国人の受け入れに慣れた地域だと私は思いました。しかし一方で、私は人々の格差も感じました。例えばおしゃれなレストランで働いているウエイトレスはみんな白人でした。けれどファーストフード店で働いている人は、いつも黒人やメキシコ人やインド人でした。どうしてこのような格差があるのか、子どもの私にはわかりませんでした。それに、最初は不思議に思っていても、すぐに気にならなくなり、それが普通になってしまいました。

アメリカに来てから一ヶ月ほどたって、夏休みがあけたころ、私は学校に通い始めました。私の家から一軒はさんで隣に私と同じ歳の女の子がいて、すぐに友達になれました。彼女の名前はエリンです。エリンとは学校でも同じクラスでした。私が不安げに教室に入ると、彼女が真っ先に私ににっこりとほほ笑んでくれました。私は少し安心しました。けれどエリンとは席が離れていて、再び不安になってしまいました。でもすぐに話しかけてくれた子がいました。その子はキャロラインという韓国人の女の子でした。

「私キャロライン。美咲よろしく。わからないことがあれば、なんでも私に聞いて。」と優しく声をかけてくれました。

私は一瞬驚きました。なぜなら、友達のお母さんからこんな話を聞いていたからです。学校の参観日に行ったときに、韓国人の女の子がおばさんの前にやってきて、

「あなた日本人でしょ。あたし日本人大嫌いなの。」といきなり言ったそうです。私は戦争で日本人がつけた傷跡が、まだ残っているのだと思いました。だからより一層、キャロラインの暖かさを強く心に感じました。私は彼女からとても大切なことを学んだ気がしました。

クラスメートは皆フレンドリーで、その後も私はたくさんの人の暖かさに触れて楽しく過ごしました。

しかし、ある日私は大きな壁に直面したのです。算数の時間に先生が3人で班を作るように指示しました。残念なことに、その時エリンもキャロラインもいませんでした。それで私が困っていると黒人の女の子2人が私に手を差しのべてくれました。黒人のあの独特な真黒な手を。でも私はすぐにその手をとることができませんでした。とまどってしまったのです。今まで黒人の子と話したこともなかったし、手をつないだこともありませんでした。私がとまどっていると、白人の友達のケイティとアリアナがやってきて、強引に私の手を引き、自分たちの班に入れてしまいました。なぜその時、黒人の子たちの班に入ると言えなかったのかは分かりません。でもはっきりしてしまったことが一つ。それは私が肌の色で、見ためだけで人を判断してしまったということ。

そういうのは間違っているし、してはいけないことだということも知っていました。人種差別をする人は最低だと思っていました。けれどこの時、私はその最低な人間になってしまったのです。私は罪悪感でいっぱいになりました。自分のしたことにこんなに後悔したのは初めてでした。

それからも私は悩みました。どうしたら、ためらうことなく手をとることができたのかを考えました。私はいつまでも最低な人間ではいたくなかったですし、皆が私と仲良くなろうとしてくれているのに、私だけが心を閉ざすのはおかしいと思いました。けれど、そう思うだけで全く成長していなかった私には、答えを出すことは簡単なことではありませんでした。考えても、考えても、自分が嫌になるだけで、少しも良いアイディアは浮かびませんでした。

そうこうするうちに、私は6年生になりました。6年生の最初の日、転校生が私のクラスにやってきました。その子はアフリカのベナンという国からきた黒人の女の子でした。私はギクリとしました。彼女が私を愛想のいい笑顔で見ていたからです。

その時でした。私の中のもう一人の私が、「今だ」と囁いた気がしたのです。今あの子に話し

第3期加東市民人権講座修了者名簿

学習の成果を地域や家庭、職場で還元していただきたいと願っています。
加東市民人権講座の３回全てに出席されたみなさんです。　（敬称略）

【社一区】　亀野義詮　三木健巳　濱咲国安　濱咲靖子
【社二区】　藤原正徳　平松誠一
【社四区】　豊永圭治　山本直人　出井　智　服部紹吾
　　幾代伸一　和田厚子
【社五区】　杉本勝義　藤原信昭　出井利郎
【ひろのが丘】　依田重貴
【嬉野台団地】　小谷美都雄
【山国】　石井貴代子
【出水】　大橋利正　大橋梅雄
【田中】　黒石　一　黒石啓司
【貝原】　世良田清　藤本美子
【野村】　西山智加子　西山初美　宮崎厚子
【西垂水】　武部比良志　上月利治
【窪田】　前田芳郎　中谷幹夫　前田壽貴　中西省三
【家原】　藤本克弓　大橋敏郎　井岡三枝子　藤本貴久夫
【上中】　神戸　仁　亀野一義　森本ます子
【梶原】　上原良宏
【喜田】　内藤季宏　岸本芳雄　岸本育美
【沢部】　田中量基
【上田】　黒田　毅　上石潤子　石井正代
【大門】　森井幸子　小林眞琴
【西古瀬】　小堀義隆
【東古瀬】　神村槇生　上月和寛　岡　敏久
【屋度】　服部美千代　服部生久子
【東実】　小林昭紘　山中　勇　山田一典
【廻渕】　都倉憲郎
【上久米】　山口良久　長谷川政子
【下久米】　北山昌之　河村靖志　山本保雄
【久米】　安田慶一
【下三草】　森本善明
【藤田】　大林ひさ子　小林勝弘
【中古瀬】　小林弘子　清水由実
【湖翠苑】　寄神　剛
【上三草】　片岡広司　西山唯司
【木梨】　臼井純男　臼井伸明

【山口】　藤原良博
【吉馬】　高瀬正信
【上鴨川】　東谷雅之
【上滝野】　田中いつみ　桑村えみ子
【河高】　前田恵治　山羽正広　藤井謹一
【高岡】　杉本成子
【新町】　岩根　清　中野義信　竹内　司　星　守
　　井上　茂　吉田公子
【北野】　岡本一彦　丸山久雄　橋間敬子　内橋澄子
　　荒木礼子
【穂積】　末広浩一　末広徳美　末広純子
【稲尾】　佐伯真司　原田政博
【曽我】　竹内竜也　竹内ひろみ　竹内美由紀
【多井田】　金澤正則　土江明美　藤本真由美
【天神】　藤本　弘　村谷信男　藤原真知子　日置和子
　　油谷真敏
【掎鹿谷】　溝端ひとみ　吉田ひとみ
【古家】　豊田末子　樋口良一
【秋津台】　成瀬光俊
【少分谷】　岡田和代
【永福台】　徳本潤一
【南山】　吉川秀雄
【岩屋】　中野正博
【新定】　石田昭代　豊崎恵美子　石田　強　邦近従宏
　　平川　智
【吉井】　岸本日出夫　岸本圭司　岸本正雄
【栄枝】　藤原正人　吉田高徳
【厚利】　駒井友一　吉田道広
【大畑】　岸本敏弘
【嬉野東】　清水美千代　堂安静穂　立岡高昭

【牧野】　田尻良文　藤浦文夫
【やしろ台】　初田稜二
【平木】　畠本昌子　常見桂子
【平木】　勝田尚規
【西戸】　石田京子　針木　功
【長谷】　東嶋　信
【横谷】　石井　保　石井たけみ
【岡本】　田尻佳世子　藤井清隆
【森尾】　藤浦文子　藤浦与志夫
【黒谷】　山田　守
【常田】　岸本和彦
【松沢】　藤原吉成
【藏谷】　勝田尚規

発行　加東市教育委員会
加東市人権・同和教育研究協議会

〒679-0292
兵庫県加東市下滝野1269-2
TEL0795-48-3598　FAX0795-48-3705

編集後記

我が家には、２人の子どもがいます。毎日、遊んだあと、おもちゃを片付けません。いくら言っても上の空です。ある日、子どもがあちこちの部屋を荒らしまわっていました。「どないしたん？」と聞くと、「おもちゃがないねん。ママがどっかやってもてん」と。一緒に探しましたが見つかりません。わたしは子どもに、「自分で片付けへんから、おもちゃの場所がわからんようになるねん。次から自分で片付けたら？そしたら、わかるんちゃう？」と言うと、「わかった」と納得し、それからは、せっせとおもちゃを片付けるようになりました。子どもの目線に立って伝えられたんだろうか。